

自律的学習の促進を目指すシラバス構築：中国の大学における日本語会話コースを事例に

張, 毅

<https://hdl.handle.net/2324/1440987>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏 名 : 張 毅

論文題名 : 自律的学習の促進を目指すシラバス構築
—中国の大学における日本語会話コースを事例に—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、中国の大学の日本語教育、とりわけ日本語会話教育の現状を踏まえ、中国人日本語学習者の自律的学習の促進を目指す教育支援方法の1つとして、課題中心・タスクベースシラバスに基づいたプロジェクト型シラバスを構築し、授業実践のもとにその有効性を実証的に明らかにしたものである。

近年、日本語教育の分野において、教師主導型の日本語教育から学習者中心へと基軸が変化し、社会との関係性や学習者の多様性を重視する学習及び自律的学習への大きなパラダイム転換が見られるようになってきている。中国の大学における日本語教育でも、「言語能力」「コミュニケーション能力」と並んで育成すべき重要な能力として、学習者が主体となる「自律的学習能力」があると提唱されている。しかしながら、このような新しい教育理念が徐々に広まってきてはいるものの、単なる理念としてとどまっている傾向があり、実際にいかにして教育現場に結びつけ、自律的学習という理念を実現したらよいかの大きな課題となっている。そこで、本研究は、上記のような背景と問題意識を前提に、中国の大学における日本語会話教育の改善を目指して、自律的学習を促進するための具体的なシラバスモデルを提示し、授業実践のもとにその有効性を検証することを目的とする。各章の主な内容は以下の通りである。

第1章の「序論」では、本研究の背景、研究目的及び研究方法、本論文の構成について述べた。研究方法としては、基本的にアクション・リサーチを主体とする実践研究という研究手法を採用し、教育現場から問題発見、理論的根拠の探求、さらに教育現場に戻って、実践し、検討するという演繹的な研究手順を取った。

第2章では、中国の大学の日本語教育の指針である『教学大綱』、教育現場における日本語学習者と日本語教師へのアンケート、そして教育内容を具体化した会話教材という3つの側面から日本語会話教育の実態を多面的に分析し、検討した。考察の結果、実際の会話授業はコースシラバスに基づき行われておらず教科書をそのまま教えているため、教室活動が不十分であること、受け身になっている学習者が少なくないことがわかった。そこで、自律的学習の促進という新たな視点から日本語会話コースシラバスを構築することが極めて重要であることを指摘した。

第3章では、「自律的学習」と「シラバスデザイン」に関する先行研究を概観し、この2つの異なる視点を体系的に結びつけて考察した。まず、自律的学習に関する先行研究を概観したうえで、本研究で扱う「自律的学習」の定義を行い、日本語教育において自律的学習の促進が十分であることを確認した。しかし、シラバスデザインという切り口から自律的学習の支援を行う研究はまだ十分になされていない。そこで、本研究はシラバスデザインに焦点を絞って、自律的学習の促進を支援することとした。次に、シラバスの概念、種類、シラバスデザイン論の変遷及び日本国内外の日本語教育分野におけるシラバスデザインの先行事例を概観したうえで、学習者の自律的学習の促進に向けたシラバスデザインの方向性を見出した。しかし、中国の日本語教育においてこのような実践研究はまだ少なく、有効なコースシラバスモデルが提示されるに至っていない。そこで、本

研究を自律的学習という教育理念を中国の日本語教育現場へと結び付ける役割を担う研究として位置づけ、中国の大学における日本語会話教育を実践するにあたり、自律的学習を促進するためにどのようなシラバスが有効であるかというリサーチ・クエスチョンを設定した。

第4章では、第3章で設定したリサーチ・クエスチョンの改善案を探るため、コミュニカティブ・アプローチの教育理論に基づき自律的学習を促進するシラバスの理論的体系を構築した。具体的には、内容重視の言語教育とタスク中心の言語教育という2つの教育理念に基づき、話題中心・タスクベースシラバスというシラバス概念を提案した。さらに、この抽象的なシラバス概念をプロジェクト型シラバスとして具現化し、その実現可能性について考察を加えた。

第5章では、中国の大学における日本語会話教育の現場に戻り、第4章のシラバス概念の構築に基づき、学習者の具体的なニーズに合わせてプロジェクト型シラバスの内容の充実を図った。まず、JF Can-do（日本語で「～ができる」という形式の能力記述文）を利用して、ニーズ（目標状況分析）調査を実施した。因子分析によって、学習者の会話コースにおけるニーズが、「論理的思考力・表現力」「内容中心」「人間関係」などの要素からなることを明らかにした。次に、より効果的な自律的学習を促進するための支援活動を探るため、学習者と教師を対象に自律的学習に関わるピリーフ調査を実施した。その結果、プロジェクト活動においては、学習目標の意識化、自己評価方法の導入、セルフモニター、教師の役割という側面に焦点を絞って支援する必要があることがわかった。さらに、以上の結果及び第3章で考察した自律的学習の5原則（学習者起点、自己決定、過程的実現、多様性、協同性）に基づき、中国の大学における日本語学習者を対象とした日本語会話コースを取り上げ、1学期間にわたる、「講師を招いた講演会」、「写真付きガイドパンフレットを作ろう」、「ディベート大会」、「印象深いポスター発表をしよう」という4つのプロジェクトからなるプロジェクト型シラバスを作成した。

第6章では、第5章で作成したシラバスに基づき、「プロジェクト会話」コースを事例として設定し、実験的な授業実践を行った。授業実施後、量的には、(1)学習者の自律的学習に対する意識変容の分析と、(2)プロジェクトに取り組んだ時の感情、動機づけ、そして授業後の言語能力の向上に関する分析を行い、質的には、自律的学習を構成する1つの要素である「メタ認知的知識」の習得を解明するため、学習記録ポートフォリオによる自由記述を分析する手法を用いた。これらの調査分析を通して、プロジェクト型シラバスの有効性を検証した。

第7章の「結論」では、本研究のまとめと今後の課題について述べた。

以上の研究で得られた知見に基づき、今後、中国の大学の日本語会話教育の改革に向けて、学習者が主体となる自律的学習能力を育成することが必要であり、そのための方法論として、プロジェクト型の話題中心・タスクベースシラバス及びその授業実践が有効性を持つことを提起した。